
ポケスク！

うめぼし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケスク！

【Nコード】

N3416W

【作者名】

うめぼし

【あらすじ】

いつのまにか少し若返ってポケモンの世界で生きることになった少年と、少年に関わっていく人々やポケモンの話。

目指しているのは友人やポケモンたちと過ごす楽しい学園生活。（知識有りのトリップ小説を書くための練習の意味を含んだものとなっております、どちらかというと連載というよりもシリーズに近い話となっております）

・プロローグ前後は読み飛ばし推奨。世界観等の設定を出しすぎた

と個人的に猛反省の部分です…。

プロローグ(前)

ポケットモンスター、通称ポケモン。

そう名付けられたゲームはまるでお伽話のような、そんな楽しい夢や空想やちょこっと苦いものを詰め込んで出来たような世界を舞台にした物語で、またそんな物語を彩るかのように流れる音楽も世界観に合っていて聞いているだけでも心地よくなる。

それらは魅力的だけれども、このゲームでもっとも魅力となるのはそれらじゃない。

このゲームで一番の魅力とも呼べるのものは、様々な姿形をした個性的で尚且つ人を惹きつける何かを持っている、そんなポケモンとよばれるキャラクターたちだ。

100以上の数を誇るそのキャラクターは物語の人々だけでなく、ゲームをプレイする現実世界の人間たちからも愛されてきた。

そしてそのポケモンを集め、育成し戦わせることが出来るというのもこのゲームの魅力の一つとなった。

友人と魅力溢れるポケモンを交換し対戦する、今でこそ珍しくないものかもしれないが、当時は画期的なものだったのだ。のだ、というけれどそんなに詳しくは無いので、正しく言うのだっただけだ、だけど。

しかしそんな輝かしい栄光を掴む運命を持っていたこのゲームは、発売当初は決している売上を伸ばさなかったそうだ。

数ある中の一つのゲームとして埋もれてしまうような、そんなゲームだった。

それがどうだろう、伸び悩んでいた（かはどうかは知らないけれど）
売上ではあったが、そんな懸念を吹き飛ばすかのようにゲームを
プレイした人達の口コミが広がり、それに合わせじわじわとし
し確実に売上を伸ばしていく。

そして気がつけば国内のみならず国外までもブームを巻き起こし
た子供から大人まで楽しめる、そんな大人気のゲームにまでなっ
ていた。

そんな歴史を持つこのゲームは今だ人気が健在しシリーズが続い
ている、名作と呼べるものだ。

それこそポケモンという名を知らない日本人の方が少ないのでは、
と思えるくらいには日常に浸透しているゲーム。アニメにマンガに
カードに、とゲームから派生したものは数多くある。

そんな現実から少し離れて架空のモンスターと架空の街を旅をして
いくゲーム。

そう、どんなにブームを巻き起こし社会現象になったとしてもこれ
はゲームであり、あくまで仮想世界の物語であつたはずだ。
そのはず、だったんだ。

テレビに映る天気予報のお姉さんが「今日は暑い天気になりそうです、日射病にご注意を」なんて言って太陽に似た姿になっているポワルンと一緒に笑顔で今日の気温のことを説明してくれているのなんて尻目に、俺は靴箱から新品の靴には目もくれず使いなれ少し汚れてしまった方の靴を取り出す。

そろそろ新しい靴にはきかえないとは思うんだけど、出来れば今日は動きやすいものがないから新品はまたの機会にしておく。

それから、お天気お姉さんの言葉を真に受けているわけじゃないけど日射病を避けるためにここ最近、それこそ毎日のように被っている帽子（もはや俺のトレードマークになっているのではないのだろうか）を今日も当たり前のように頭に被った。

そして教科書が入っている子供にはやや重たいリュックを肩にかけ、最後に靴紐を結び直して準備万端と頷く。

あとは忘れ物の心配だけだけれど、昨日リュックの中身は確認したし、忘れ物はおそらくはないだろう。

ポケギアもしっかりと充電して持ったし、ハンカチとちり紙もポケットに入ってる！

頭の中で忘れ物がないことを確認した俺は、それからやっと見送りをしてくれる両親の方へと振り返る。

そしていつものように笑って一言。

「それじゃ、行ってきます！」

「いってらっしゃい」

「気をつけてな」

「うん！」

にこやかな二人に見送られて元気いっぱいの返事を返しながら、俺

は朝日が照らして眩しくまた暑いだろう外へと飛び出すために、
玄関のドアを勢いよく開けた。

家から一歩外に出れば、それだけで世界はがらりと変わる。

何かを探すよう上を見れば空を飛ぶポツポの群れ、それから自分の
まわりを見れば楽しそうに遊んでいるオタチ、コラッタなどのポケ
モンが目に入る。

あとはトレーナーがつれているポケモンとか。

とにかく、家にポケモンがいないこともあって世界が違って見える
のだ。

なんて、カッコイイことを思ってみたり。まあ感動するのはたしか
なんだけどき。

そんな、草むらの中でじゃれているオタチやコラッタをかわいいな
あと思いがちながらもこんなことを考えやや上の空状態で歩いている俺
は、なんてことはないポケモンスクールに通うまだポケモントレー
ナーにもなっていないただの子供。

ただ普通の子供と違うのは中身だろうか。

といっても特別に頭がいいだとかIQが高いだとか、人の心が読め
るだとかそういうことじゃないくて。

こんなことを言ったら頭の可笑しい人扱いされてしまうから誰にも
言ったことがないのだが（異常者じゃないのに異常者扱いされる危
険があるからなあ）、俺は現実世界というかなんというか、この世
界とは違う世界で生まれた人間なんだ。

念のためにもう一度言っておくが、俺は本当に精神異常者じゃない。
断じて無いからな！

とはいえ、じゃあどうやって現実世界からこの世界にやってきたのかを聞かれると何も答えられない。

俺、科学者じゃないし。ここにきた時の記憶なんてないし。

でも俺がこの世界の生まれじゃないのはたしかなんだ。

なぜなら、俺はこの世界に来る前の記憶を持っているから。

そしてその世界ではポケモンは仮想世界の生き物でありただのデータであり、娯楽のゲームのひとつだった。

そんな現実世界の俺は一般より少し金持ちな家の一人息子として生まれたものの、どういうわけか非常に体が弱く、まともに外で遊べないどころか20歳まで生きられるかどうか分からないタイムリミット付きの子供だった。

ドラマやアニメにいいような設定をもってる奴だろ？

嘘だと笑えたらどんなにいいか、でも嘘のような話で嘘じゃない。今の医学でも延命治療が精一杯の奇病。金持ちの家に生まれなかったらとつくに死んでただろう。

そんな俺だったから当たり前のように外で遊ぶ体力も元気もなく、そのせいで日に焼けることのない肌は（自覚こそなかったのと言われた時の言葉で言うならば）女の子みたいに白かったらしい、そして常時ベッドの中って生活だったから筋肉なんて無いもやしの中のもやし。

悲しいかな、キングオブもやしとは俺のことだろう。

でもそんな俺でも、一人じゃなかった。友人はいたんだ、こんな俺だけ。

まあ、一日中病院のベッドで横になってる俺に友人なんて呼ばれるんだから察しはつくと思うけど、そいつらは同じ病室になって知り合った年齢が近い奴らだ。

でも俺としては友達を作る場というのは病院の中というのが常識で、友人と喧嘩したり遊んだりする行為すら、病院で覚えた。

大袈裟、なのかもしれないけれど俺にとって病院の中は俺の世界だった。

病院から出る機会がほとんどない以上、病院のことしか知らない。だから病院で起こること、体験することが俺にとっては当たり前のこと。

……でもま、そんな俺みたいな不健康の奴と同じ病室なんだから当たり前のように全員病人。どうしても体が弱いのがデフォルト状態で。

現実世界の俺は20歳の大人、どころか高校に入るか入らないかわらないの年齢で死んだんだけど、それでも残酷なもんで俺より早くに死んじゃった友達は何人もいた。

そのたびに泣いて、でも一人は寂しかったから友達を作るのをやめたりは出来なかった。先を考えるのはつらいけど、それでも今を楽しみたかったんだ。

そのせいで友人を何度も見送ることになった。だけどやめられなかった。

だからか、死っていうものはすごく身近なことに感じてて、俺が死んだらこの魂は一体どこに行くんだろうとは考えたことはあるっ

やああるんだけどさあ、

「まさかポケモンの世界に行くなんて、想像もつかないっつの」

誰も俺の言葉を聞いていないのをいいことに、ぽつりと呟く。

そう、想像さえもしていなかった。

死んだと思ったらいつの間にか病室で意識が戻って、目を開いたら安心したように泣いて俺に話しかけてくる両親の姿が写って、そんな両親に対して返事をした自分の声はやけに幼いし、不思議に思いつながら顔を動かした先にあった窓の外ではポケモンがいるなんていう異常事態。

そんな状況に置かれてパニックを起こし事態がややこしくなったことはまあ今は関係ないので置いて、なんだどうしたとやっていく内に俺が現実世界で死んでポケモンの世界の病室で目覚めてから早半年が過ぎていた。

まあ、その半年で分かったこともあったんだけどさ。

それはこの世界もまた、現実世界と同じように作り物の世界じゃないということだ

。最初は死ぬ間際に見る願望で作られた夢だと思ってたけど、どうやら俺は夢を見ているのではなくて小説や漫画でよく見る「憑依」って状態になってるようなのだと気づいた。俺の考えが正しければね。

そして憑依した人間の体もおかしなものだった。

15歳の俺をそのまま健康的に幼く（といっても5歳若返った感じで10歳くらいになったただけだが）したような容姿、当たり前のように外で遊べるような体。

病弱で外にすら滅多に出れない現実世界とは正反対の『俺』は、そう、まさに俺が幾度となく夢見た『俺』だったんだ。

こんな体があったらと何度も思い、いつかそうなることを願った体。そんな体を死んだと思ったら手に入れたんだ。俺が夢だと思うの、無理ないだろ？

でも夢じゃなかったんだよなあ。

どうも両親や病院の先生の話を聞いた限り、俺の願望の塊であった『俺』は、運が悪いことに階段から足を滑らせ、その時に頭をヤバイ感じ打ち付けてしまい病院に運ばれたらしい。

その後一度だけ心配停止になったんだが（俺の考えではこの時『俺』は死んで、どういう過程があったのかは知らないが現実世界で死んだ俺がどうしてか『俺』の体に移ったという結論だ）懸命の治療の甲斐あって一命をとりとめたんだと。

なので俺が別のことでパニックになった時も都合よく頭を打ったからだとかそんなんで片付いた。

俺もこれは夢だと思っていたから楽しまなきゃ損と言わんばかりにすぐにはしゃいじゃったからなあ、夢じゃないって気づいた時はもう環境に馴染んでたし当然の診断なのかも。

しかし夢だと思ったからとはいえ悩むより遊ぶ方を優先するなんて、俺って実は大物かもしれない。

夢じゃないかもって気づいたのも、何日経っても目が覚める気配が無いどころか痛覚だとか味覚だとかそんな五感が全て感じられたからだ。

うん、そこでようやく夢じゃないかもしれないと気付く俺は、なん

というか、大物というよりバカだ。

そんな感じでわけの分からぬまま俺は現実世界で死んでなぜかポケモン世界の若い『俺』に憑依して、知らぬまに世界へやってきたのである。

その原因は未だ不明。夢じゃないとは思ってるけど、夢かもしれないって不安にかられることもある。

次に目が覚めたら、それは死ぬ瞬間なんじゃないかとか。

そんなことを考えていても朝はきてくれる。

だから俺はとりあえずここは夢じゃないってことにしている。

ならポケモン世界の『俺』は？

そう疑問に思ったことはあるが、おそらくポケモン世界の『俺』はあの心配停止の時に死んでお空の上にいったのだろうと思う。

現実世界の俺の体はガタがきてて本当に限界で憑依なんて出来ないだろうし、出来れば憑依してほしくない。

だってそうだろ？あんな体に憑依しても待っているのは苦しみとすぐ後ろまで来ている死だけだ。

そんな希望も何もない状態ならまだ死んだ方がマシだ。

健康な体を持つ今は余計にそう思う。あんな体、健康な奴が突然なったら耐えられない。

「まあ、それでも生きたかったんだけどなあ、俺は」

でもそれは俺のためではなく、俺の両親のために。

長男で一人息子という立場なのにこんなことになって、両親は嫌な顔せず毎日のように見舞いにきてくれたけど、その笑顔を見るのはいつも辛かった。

疲れた顔を隠すように俺を元気づけてくれたけど、それがひどく辛かった。

もっと健康に生まれてくれればなんていつも思ったし、どうしてこんな体に生んだんだと逆恨みしそうになったこともあった。

金だっけかなりかけてくれたと思う、病院だっけタダじゃないし。

そんな出来そこないで疫病神みたいな俺なのに、両親は愛してくれていたから。

愛情は、いつもはつきりと伝わってきていたから。

だから死にかけの体だったけど、何にも出来ない俺だったけど、せめて体が悲鳴をあげる最後の時までには生きたいと思った。

自殺なんてまっぴらごめんだっけし、どんなに苦しくても死にたくないと思った。

もしかすると、そんな尋常じゃない生への執着が俺がここで生きている原因なのかもしれない。

それとも『俺』が俺だったように『両親』は俺の知る現実世界そのままの両親だったから、あの世界で親孝行出来なかった親不孝者の俺に、誰かが親孝行の機会を与えてくれたのかな。（だって両親のあんな清々しいほどまでにっこりとした笑顔は、この世界にきて初めて見た。現実世界の両親の笑顔はどこか影があったから）

何にしたって、この世界で生きるチャンスが出来たなら、俺はここで生きていく。

もしかしたら憑依でもなんでもなく、ここは天国なのかもしれないし地獄なのかもしれない、あるいは死んだら好きな世界へ行けるの

かもしれない。死後のことなんてよく分からないけど。でも自分の出来ることだなんて限られているのだから。

「よっし！今日も一日がんばるぞ！」

俺の声に驚いてポツポツたちが空をはばたいていく。それを見上げながら、俺はこうして今生きていられる奇跡に目眩すら覚えた。

生きている、そして健康で何不自由無い体がある。それだけで何物にも劣らない幸せがある。

それを実感する度にひどく泣きたくなるんだ。

プロローグ（前）（後書き）

世界観の設定とかを出しすぎてつまらないよなプロローグ前編です。削って削った結果がこれでした。前後通して気に入らない部分があるものの、ではそれぞれどう言葉を変えるなり削るなりして修正するかすら決まらずるここまできた、という…。

けどポケモンの世界観やらを書いたり想像したりするのは本当に楽しいです。

こういう作品は初めてなので手探り状態なのですが（BASARAのは完全に意思疎通不可能なトリップでしたし）楽しんで書いています。

プロローグ（後）

ところでこのポケモンの世界にも、もちろん前の世界と同じように学校がある。

そりゃそうだよな、無法地帯じゃないんだし塾帰りなんてトレーナーがいるくらいだし。

俺もこの世界に作られている学校に通う一人の生徒だ、ただ義務教育かと言われるとどうもそうじゃないらしい。

どう見ても学校に通ってる年齢なのに旅に出てるって子供もいるらしいし。アニメのサトシ、みたいな感じか？

なんつーか、前の世界（というか日本）じゃ考えられないよなあ。

俺？ 俺は旅に出たいとか今のところ思わないんで最終学年まで通うと思う。

あ、でも、補足しておくそうという生徒の方が多くて、実際のところ旅に出るのは本当に少数で基本は皆学校通いだ。

そりゃ親だってサトシくらいの年齢で旅に出るなんて許さないだろう。不安だし。

ちなみに学校の名前は一部を除き統一されていて、ポケモンスクールというああポケモン世界の学校なんだなあと思わせるような名前になっている。

ゲームでも出てたっけな？

そのポケモンスクールというものはその名前通りポケモントレーナー育成のためだけでなく、子供たちの教育の場としても作られた、俺のもといった世界でいうと義務教育のない小学校みたいなものであ

る。

もちろん前の世界の小学校とは習うものが違うところもある。

俺は体調の理由からあんまり通わなかったんで詳しいことまでは分からない、だが確実に違うと分かるものはあった。それは（当たり前のようにだけど）ポケモンについての授業だ。

このポケモンスクールでは国語算数理科社会の小学校で習う代表的な四大科目の他に、ポケモンについてを学ぶ授業が大切な科目の一つとして追加されてる。

まあこの世界では身近にいる生き物で誰もが持っているような存在だから当たり前のことかもしれない。

ただそのポケモンの授業で教えてもらえる内容は、ゲームをやっていれば自然と覚えるようなものからゲームにはないようなもの（たとえば危険視されるポケモンをゲットした場合には国へ申請しないといけないだとか、進化することによって狂暴な種類に識別され国に申請をしなければならぬポケモンの場合にはどうすればいいのか、とか）まで様々ある。

まあ実際にポケモンがいたらこうなるんだろう。

コイキングを育ててギャラドスに進化したとして、ゲームでは強くなったとか覚える技が変わっただとかそれくらいに住むけれど、ここじゃそうはいかない。

なんてったって怒りで町の一つ二つを潰すポケモンだ、国が危険視してもおかしくない。

だから国への申請が必要で、申請なしに所有している場合は罰則があるそうだ。

どんな内容かまではポケモンスクールで習わなかったけれど、これは多分高学年になったら教えられるんだと思う。

そしてこういうのがなかなか面白いんだ。

なんというか、攻略本に書かれている裏設定を読んでるみたいな気になるんだよな。

まあ10歳になるかならないかの子供に法律関係みたいなことを教えてるわけだから内容は優しいし、固苦しい言葉がいつさい使われてないからそう思うのかもだけど。

もちろん法律以外にもゲームじゃなかったというか、作られていなかった設定がいくつもある。

この世界で生きていこうとしている身なのでそういうものは率先して頭に叩き込んでいるが、そうして知識を増やしている内にゲームにあるシステムとはまったく違っていいほど違うものがあることにも気づいた。

それは些細なことから大きなものまで様々だが、中でも一番俺がビツクリしたのはこの世界のポケモンはレベルの概念があまりないことだ。

レベルの高い低いはもちろんあるし経験の差というものだってあるけれど、ゲームでは技を覚えるレベルになったからといって、その通りに必ず技を覚える……なんてことにはならないようなのだ。

技の習得はレベルではなく経験によるものとなり、その結果ゲームで覚えた順番とは違う順番で技を覚えたり、また新しい技が使い勝手がよくそればかり使っていると、使わなくなっていった技は自然とやり方を忘れてしまうらしい。

どういうことかという、たとえばハイドロポンプばかりやっていると水鉄砲を打つときの水の量が分からなくなり、結果使えなくなる。そんな感じ。

まあまた練習すれば使えるようになるけど、威力の高い技を覚えた

らそっちばかりを優先して使うだろうからトレーナーもポケモンも気づかない内に忘れてしまう。

それは多分仕方がないことだ。そしてわざわざ威力が低い技を思い出そうとは思わない。だから忘れて、そのまんま。

まあ忘れるっていうところはゲームと一緒に、なのかな？

でもこの世界ではレベルを調べる機械がなく覚えている技をポンツと忘れさせるような機能もない。

ポケモン図鑑で分かるのは覚えている技だけらしいし。あと備えられてるのは進化キャンセルくらい？

だからポケモンの身のこなしや技の威力を見ればレベルが高いか低いのかは分かるらしいけど、具体的にいくつかも分からず技もあてにならない。

ゲームの知識でポケモンバトルをしたら痛い目を見そうだと俺は考えてる。まあ一匹も持っていない子供の意見ですが。

あとはレベルの概念が薄くなった分なのかはしらないけれど、ポケモンの覚えていられる技が4つ以上になったってこともゲームとはまるで違うところ。

どれくらい覚えられるのかはしらないけど、少なくとも4つ覚えたらもう無理なんてことはないみたいだ。

ゲームはバランスを考えて覚えられる技は4つまでになってるんだろうけど、ま、この世界じゃ違うだろうなあ。

人間より明らかに頭の出来が上なポケモンもいるのに、技が4つだけというのもおかしい話だ。

そんな感じで頭につめこんだり上書きしても覚えたり意識を改めたりしなければならぬことが少し思い返したただけでも数多くある。

けど、だからといってゲームの知識がまるごと役に立たないワケでもない。

木の実や道具の効果や技マシンの種類、ポケモンが覚えられる技や特性などゲームと変わらない要素はありがたいことにいくらでもあるのだ。

ポケモンをやり込んだ俺にはパツと見て分かるものも、この世界じゃ重要な知識のひとつ。

そのおかげで無理して机にかじりつかずともテストで余裕の100点を連発でき、今じゃ学園一の秀才状態だ。

ゲーム感覚でポケモンの知識を詰め込めるのがやっぱりポイントだろう、勉強してるって感覚よりゲームの設定をおもしろおかしく読んでもる気分だし。

まあ、他の教科についても見た目はともかく中身が15歳の俺は、あっちの世界ではあんな貧弱な体をしてたが一応（望みは非常に薄くても）高校に行く可能性を考慮して勉強もしていたので、100点は当たり前なのだ。

むしろ小学生がやるテストで100点をとれない方がマズイんだよね。

だけどこれは決して褒められたことじゃない。

他の子に比べれば俺のテストの結果なんてインチキなもんだろう、本当はテストで一位なんてとるのはおこがましいし頑張ってる他の子に悪いんだが、100点をとると両親が喜ぶんだ。

だからごめん皆……。俺はクラスメイトたちより両親の喜びをとったんだ。

けどそんなふうにならに楽しく過ごせるのは今日までだろう、と俺は思ってる。そしてそれが喜ばしくて仕方のないことだとも。なぜならば……。

この日から、今までの日常が一転する日だからだ。

考え事をしていたおかげでいつのまにかついたポケモンスクールで（習慣ってのは怖い）上履きに履きかえ自分のクラスに入れば、俺に気づいたクラスメイトがおはようも忘れて声をかけてくる。でも俺もそんな感じのテンションだから全然気にしないっていうか出来ない！

「ソラ、ついに今日がきた！」

「ああ！もう今からドッキドキ！」

「な！」

スクールについてそうそうクラスメイトとテンションが上がっている会話をしつつ（あ、ソラというのは俺の名前だ。漢字で書くと空なのだが、なぜかこの世界では皆名前がカタカナなので必然的に俺の名前もカタカナとなる）、俺は高揚してくる気分を抑えることが出来ずにいた。

そう、皆がワクワクしている。俺もワクワクしている。

なぜなら今日は、待ちに待った最初のポケモンが配られる日だからだ。

ポケモントレーナーになるには年齢が定められている、それが10歳という歳。

といっても必ずしも10歳の誕生日を迎えなければいけないわけではなく、その年に10歳になるならば9歳の内にポケモンを手にする事が可能だ。

ポケモンスクールではそんなポケモントレーナーになる子供たちのために、毎年ポケモンを支給している。

といっても支給されるのはヒトカゲ・ゼニガメ・フシギダネといった有名な御三家じゃなく、生徒である子供たちの性格や態度、またテストの結果などによってなるべく生徒に合うようなポケモンを最初の一匹として吟味し生徒一人ひとりに渡すらしい。

聞いた話だからどれほどの信憑性があるかは分からないけど。

勿論御三家がくることもある、けどそれ以外のポケモンであることの方がずっと多いんだとか。

そして、テストの結果によっては初心者には少し難しいポケモンを『生徒のレベルに合わせるべく』渡すこともあるらしい。

俺は多分、これに当てはまる、と思う。いやだから、俺はインチキではあるものの優秀だったんだって！

だから、きつと楽できる学校生活はこれが最後だ。でも後悔はしてない、不安はあるけどさ。

楽出来なくてもポケモンスクールって、すごい楽しいし。

学校ってこんなに楽しいもんなんだって驚くくらいだ。

あっちの世界じゃ学校なんて数えられるレベルでしか行けなかったし、そんな状態で友達作りなんて無理だったしな。

どんなポケモンがきたって構わない、すぐに仲良くなれるかは分からないけれど、少しずつ距離を縮めていつかは仲良くなってみせるのだ。

そんなことを決意しながら、俺は興奮気味な友人たちと会話を続ける。

「やっぱかっこいいポケモンがいいよな！オレはギャラドスがいい！」

「ギャラドスはさすがに無理だろうけど、かっこいいポケモンはやっぱりいいよな！」

小学生の友人と侮るなかれ。

この半年、気がね無く友人として距離を縮められたのは子供が純粋だったからだ。

ただ仲良くなりたいから仲良くなる、それだけ。

だけど俺にはそれがありがたかった、なんせ住み慣れてない場所だし。

それに、俺たち家族がこけに引っ越したばかりだというのも実はすごくありがたかった。

生半可な知り合いよりゼロから環境の方がずっと気が楽だし、俺が変だと思われることもないだろうし。

そういう意味じゃ、『俺』に憑依した俺がスタートするには最高の環境だったのだ。元気な体があるだけでもう俺にとっちゃ最高だけ

ど。

「ダイチはギャラドスかー、俺はやっぱりリザードンかな。飛べるし」
「おお、リザードンもいいな！」

「だろ!？」

そして俺と一番気の合った友人が今話しているダイチ、こいつだ。
ダイチより俺はずっと年上なのだが、俺の精神年齢が低いのか遊んで凄楽しいんだよな。

今ではもうツーカーのような感じでダイチと一緒にいる、それで俺にああ体を動かせるとこんな楽しいんだなっていうようになっていうような遊びまで教えてくれる。

遊びに関しちゃう俺よりずっと先輩だ。

いっつも外で遊んでいるからか黒い肌もなんていうか、病院の友達とはまるで違う。

俺がもやしだったこともあり、こういうタイプの友人は出来ないだろうと思っていたこともあって本当にダイチと友人になれたことは嬉しい。

「ソラは頭いいからもらえるんじゃないか？」

ダイチの言葉に俺は（でもインチキなんだよなあ、今までの結果）と申し訳なく思いながら、俺は目をそらして頬をかく。

それがどうやら照れているように見えるらしいけど、実際は罪悪感にかられてるだけだ。

「もらえるところしたらヒトカゲかなあ、リザードンは危険視されてるポケモンだから申請が必要だし」

そして照れているなんて考えを壊す自信過剰な発言。

申請がいるポケモンの特徴としては怪獣っぽいというか、大型ポケモンのほとんどだと思っ

ていい。大型のポケモンは力が強く、人間じゃ歯がたたないから危険視される、簡単に言えばそんな感じ。

まあ申請して許可がとれば誰でも持てるが、そういうポケモンは野生で捕まえちゃうと信頼関係を築くのが大変で人間のいうことなんて聞かない奴が多いらしいし。

かつこいいが、パートナーにするにはかなり厳しいポケモンだ。

未進化の頃から信頼関係を気づいて共に成長していくか、あるいはエリートまでいってようやく野生に手を伸ばす、ってレベルだろうか。

そんなポケモンが欲しいだなんて高望みしすぎだけど、いいよな？
小学生の言うことだし。

「でもま結局のところ、もらえるならどんなポケモンでもいいんだけどさ！」

「まあそうだけどさあ、カッコイイヤツがいいじゃん」

「うーん、俺としてはそういうのより、もっと問題が」

「問題？」

「そ、仲良くなれるかって問題」

そう、仲良くなるにしたってもらったポケモンとどれだけ早く打ち解けられるか。

やっぱり初めてのパートナーとはすぐに仲良くなりたくないじゃないか。

これだけは触れ合うまで分からないからなあ、不安なのだ。

プロローグ（後）（後書き）

やっとプロローグの終わり。なんというか、猛反省です。上手く書きなおせるようになり次第修正する予定です。

このシリーズでは基本的に主人公が幼く感じるように書いています。この世界に来る前が前だったので変に達観した部分を持った、けれど年相応にすらない少年として書いていますがどこまで上手く表現できるのか…。

第一話 はじめましての始まり

時間の流れは早いもので。

ダイチとどんなポケモンがいいか話しているとその話にのった男友達に加わり（ちなみに女子は「男ってガキよねえ」とマセたことを言っただのポケモンがいいのかそしてかっこいいのか談義には加わってこなかった）話が白熱していつてあっという間に担任がモンスターボールを配る時間になった。

いつもなら教室に入ってきた若い女性担任の「はーい着席！」の声が届かず話し続ける奴らもいるんだけど、さすがに今日はそんなことにはならず。

皆我先にと席に戻って先生の次の言葉を待っていた。

「それでは、心の準備はいいですか？皆さん」
『はーい！！』

皆のうかれている気分についつい俺まで乗せられながら、ポケモンと接するにあたっての担任の先生の注意事項を聞きつつ、でもひたすら先生ではなく教卓の上に乗っている新品の赤と白の色で出来たモンスターボールを見つめていた。

でもそれは俺だけじゃなく、この教室にいる生徒すべてだろう。それくらい、俺も含めて皆今日という日を楽しみにしてきたのだ。今日を楽しみにし過ぎて寝不足だというクラスメイトもいるくらいだ、もっとも俺は今日という日が楽しみでついはいしゃぎすぎてしまっって、昨日は疲れて寝てしまったんだけど。

遠足前ってこんな感じだったのかなー、前の世界の俺は遠足なんてほど遠い状態だったしなあ。想像で比較するしかない。

しっかしはしやぎすぎて疲れて寝るなんて、今思うと高校生にもなる年齢の人間がするとは思えない行動だった、どうも体を思う存分動かせる魅力に取り付かれてついつい限界まではしゃいじゃうクセが出来たみたいなんだよなあ。

うまく体力をセーブ出来ないというか、なんというか。病人の頃で着なかったことを思う存分やれるから、セーブしたくないって気持ちまであって。

いずれ自分の体力を考慮しながら動ける人間になんねえと。トレーナーになったらこれまで以上にはしゃぐのは目に見えているのだから。

「ふふ、いいお返事です。それでは」

なんていつのまにかポケモンから離れた方向に考えをめぐらせ始めた俺をよそに、担任は話を進める。

今重要な考えってわけでもないの、その言葉で俺はまた意識をポールへと戻した。

それと同時に教室の雰囲気にもまた流されそわそわとしてしまう。

もったもこんな興奮した生徒たちの対応は慣れっこなのか、担任は動揺することも緊張することもなくポケモンの入ったモンスターボールを渡すために生徒の名前を呼びはじめただけれど。

若いのに手慣れてる、……実は見た目が若いだけとか？

いやまさか。そんなことあっていいはずがない！

「ダイチ君」

「はい、はいはいはい！！」

俺の中で若作り説が出てきた、そんな担任が最初に呼んだのは俺の一番の友人、ダイチだった。

うおお、ダイチからか、いいなあダイチ。

果たして何をもらうのだろうかと俺達はざわつき（全員がもらうまでモンスターボールは開けちゃいけないのである意味ダイチは最大の生殺し被害者なわけだが）、早く自分の番にならないかとうずうずしながら担任の口元とモンスターボールを見比べる。

まさに餌を目の前にして待てを言われた飼い犬の気分。誰もが次は自分が呼ばれたいという思いで前のめりになったり、腰を浮かせたりとさつき以上にせわしなくなる。

そんな興奮状態にいる俺達を微笑ましそうに眺めているのは、担任含めるこの教室にいる先生たちだ。

まるで授業参観のようだが、いつもはこんなに一つの教室に先生はいないぞ。

多分こんなに先生が集まっているのは、新人トレーナーになる子供達のフォローと何かあった場合の対処のためだろう。

いつもは見ない何人かの先生が教室に来てるんだ、見学ってわけじゃなさそうなのに授業参観状態になってるんだから少し考えれば検討はつく。

伊達に中身は年取ってないぜ！

しかし万全の体制だなあ。

さすがに女性の担任一人じゃトラブルが起こったときに対応しきれないだろうし（1クラスと侮るなかれ、子供は時として怪獣のような力を発揮するのだ）、それを考えたとしても何かトラブルが起きた場合の被害を最小限に抑えられるようにと人手を惜しまないところはさすがポケモンスクールというか。

国からの援助金とかがどんくらいきてるのか知らないけど、金かけるべきところはしっかりと惜しまずに金かけてる感じがして（あくまで感じ。本当のところは分からん）マジでいいよこの学校。

……いや、嘘じゃなくて本当に子供に優しくて素晴らしい環境なんだよねこの学校。

質問にも嫌な顔しないで答えてくれるし、凄い親切だし。この学校通えてよかったー、と思う。ほんとに。

今までずっと腫れ物扱いされてたっていう過去があるから余計にそう思うかもしれないけど。

まあ万全にしすぎじゃね？って考えもあるけど。

こんなに人を集めなくなっちゃって子供にとってもポケモンは身近にいる生き物だし、それにまだこの世界にきて半年しか経っていない俺ですら接したことがあるほどだし。

多分、万が一に人を備えただけでトラブルが起きる確率は少ないんじゃないかと思う。散々褒めというアレだけど。

子供になにかあったらマズイからこの体制を維持してるだけで、実

際はいらなんだろうよ。
先生たちも和やかに俺達を見ててカケラもピリピリしている様子もないし。

だから俺たち大人の感情に鋭い子供も必要以上に怯えることもなく、担任に名前を呼ばれてモンスターボールを受け取る姿を眺め、自分の番はまだかまだかと名前を呼ばれるのを待っていった。

そして。

「最後に、ソラ君！」

「はい！」

なぜ俺が一番最後なのか。名前順でもなければ席の順番や背の順でわけでもない。

おかげで最後まで焦らされた気分になってしまったけれど、ようやく俺の番だ。

「ポケモンと仲良く、助け合ってね」

「はい！」

緊張で強張り震えそうになる足で先生の前まで歩き、モンスターボールを受け取る。

そしてしっかりと担任から受け取ったモンスターボールを手に持ち、自分の席まで戻る。

それだけなのにじんわりと手に汗をかいた。

うわああ緊張するし楽しみだし不安だし嬉しいし自分の感情がわけ分からん！

もう早くモンスターボールを開けて俺のポケモンを見てみたい！ああ見てみたいのに！

まだ担任がよしと言ってくれないので皆モンスターボールからポケモンを出さない（というよりだしたくても出せない）のだ。これで先生が一言でも許しの言葉を言ってくれば俺達は光の速さでポケモンを出す。

犬の気分、じゃない。俺達はもはや、犬そのものだ。

そんな俺達の気持ちがわかっていいるのか、先生はくすりと笑った。

先生、かわいい系の人なのでこの仕種が凄いい似合いますよー！でも美人でもあります、先生！

でも今俺達が望んでいれのはその笑顔じゃない！許しの、許しの言葉なんだ！

なんてそんな俺達の願いは届いたのだろうか。先生がまるで慈愛の女神のような神々しさで口を開く。

あ、今の言葉無し。

自分で考えててちょっと無かった。テンション上がって恥ずかしいやつになってるよ俺。

「それじゃあ皆さん、モンスターボールの開閉スイッチを押して下さい！」

『はい！！』

ああでも間違っただけじゃなかったかも。

だって笑顔がかわいい先生は優しく、俺達に「よし」の言葉をくれたのだから。

俺を含め皆いつせいに行動を開始する。

この日のためにモンスターボールの構造は習ったから戸惑うことはまずない！というかアニメや漫画と同じやり方なので迷うこともないというか。

色んな感情がごちゃまぜに入り混じったまま開閉スイッチとなってるボタンを押す。

そうすればなぜこの小さなモンスターボールに入れたのか分からないほどの大きさの固体が赤い光に包まれながら勢いよく飛び出してくる。思わずのけぞれば、イスがガタリと音を立てた。

それにすぐハッとして姿勢を戻す。最初からおどとしてちゃダメなんだって昨日先生にも言われただろ俺！

息を大きくはきだして深呼吸。

おどおどしていたらダメだ、俺は今日からポケモントレーナーなんだから！

そうして緊張を持て余しながらもじっと見ていれば、最初こそボールから溢れるように出てくる赤い光に包まれて姿形が分からなかったが、すぐにその光ははじけて消え、中にいたポケモンの姿が明らかになる。

中から出てきたのは、モンスターボールのように丸っこく傾ければ転がってしまいそうな体で、お腹であろう部分は白く他は青い体毛で覆われている。

くりくりとした黒い目と、怖いというよりもチャームポイントのように感じる小さい牙、そしてぱたぱたと振られているしっぽという組み合わせは1メートルもないだろう体と合わさるととても可愛らしく思えた。

アザラシを丸めたような姿は俺の知っているポケモン。

こいつは…そう、間違いない、

「タマザラシだ！」

タマザラシ！一瞬頭の中に半年経っても忘れられないトラウマ『無限トド』（霰の天候を利用したパーティーで使われるトドゼルガ、の内の一つの型をこう言うことがある。霰が降っていると特性でHP回復、するだけならまだしもそれを利用した身代わり守る絶対零度の組み合わせは鬼畜だ。鬼だ、畜生だ。対戦した俺の心に大きな傷痕を残した。まあ無限トドじゃなけりゃトラウマになるってほどじゃないけどな、……ただタワーの絶対零度トドゼルガだけは…）が脳内を駆け巡ったが、そんなことはすぐに忘れた。

相手が使ってこなけりゃこなくない！それにこいつはトドゼルガじゃなくてタマザラシだし。

そんなことを考えている間にモンスターボールから出たタマザラシはキョロキョロと辺りを見回し、やがて俺が出したと気づいたのかじいっと俺の方を見た。

その目は敵意や警戒というよりも好奇心であふれているような気がして、これならすぐに仲良くなれるかもしれないと俺はタマザラシ

に話しかける。

「俺は今日からお前のパートナーになるソラだ！これからよろしくな、タマザラシ！」

かっこもつかない挨拶だけど、これか思い浮かばなくて。

昨日はどうやって声をかけようかと考えていたんだけど、実際会ってみると考えていた言葉なんて忘れてしまう。

でもきつとかっこつけてたってすぐにバレちゃうんだろうから、これでいいんだ。

そう自分を納得させながら握手しようと手をだして、そこでそういやタマザラシは手が無いことを思い出して、ううんと一瞬考えてタマザラシの頭を撫でてみる。

体毛がふわふわとして気持ちいい、つるつるしているのかと思ったら案外もふもふに近いかもしれない。

でもさすがに頭を撫でるなんて初対面なのに馴れ馴れしすぎたかもなあなんて遠慮なくやった後思ったけれど、タマザラシは気にしなかったように頭を撫でられて嬉しそうににっこりと笑った。

うっわあああコイツ凄くかわいくないか！？

オタチとかコラッタとかポップとか、よく見る野生のポケモンによくかわいいかわいい思っていたが、タマザラシは飛び抜けてかわいい。

女の子みたいにかわいいかわいい連呼であれだが、タマザラシかわいいな本当！

こっちまで嬉しくなってくる。さっきから嬉しくてしょうがないん

だけど、さらに嬉しくなるっていうかさ！

そんな抑えきれない気分のまま、さすが氷タイプというか、これが通常なんだろうが異様にひんやりとした頭を撫で続けていると、それだけじゃ物足りなくなっただのか突然タマザラシが飛びついてきた。胸近くまでジャンプしてスキんシップをはかろうとしたタマザラシに俺もにっこりと笑って両手を広げ……

「っっ！！？」

「ソラ君！？」

わあかわいい、と胸に飛びついてきた受け止めようとして、俺はその小さな体を支えきれずに背中から床にダイビングした。

机と椅子が倒れる音と、それに驚いた担任が俺を呼ぶ声が耳の端っこ辺りで聞こえてくる。

そしていきなり倒れた俺にタマザラシが驚いておろおろしながら心配そうに俺を見下ろすタマザラシの姿も。

だが問題はそこじゃない！！

「大丈夫かソラ君！？」

「お、おも……」

慌てて担任と体育会系の男の先生が近づいてきて、俺の身に何が起こったのかすぐ分かってくれたのだろう、体の上にいたタマザラシを軽々と退けてくれた。

それでやっと一息ついて体を起こす。

途端に飛びつかれた胸やらダイビングした背中やらから痛みが走っ

たが特に骨も折れてないっぽいのでよしとした。

大丈夫、これくらいじゃめげない！

「すみません、助けてもらっちゃって」

「生徒が困っていたら助けるのが先生だ、それにこれくらいのこと
は『助けた』の内にはいらんよ」

「あはは……ありがとうございます」

いい先生だなー、と思いながら俺は今度は心配そうに俺を見上げる
タマザラシの頭を撫でる。

いやあころころと小さく丸い体をしていながらこいつ

めっちゃくちゃ重いっ！！

子供には重過ぎる！見かけに騙されて受け止めようとしたら、思わ
ぬギャップを喰らったという感じだ。

受け止めようとしてその重さに耐え切れなかった。

ポケモンのゲームをやったことがあるとはいえど、体重まで覚えて
るわけじゃない。

見た目で判断しすぎたかなあと反省していると、そんな俺とタマザ
ラシの様子を見ていた先生が少し関心したように呟いた。

「しかしもう懐かれるとは……気が合ったのかな？」

「ううん、気が合ったというか、人懐っこいというか……」

「そうか。どちらにしても仲良くなれたことはいいことだ。だがタ
マザラシは40キロに近い体重がある、気をつけるんだぞ」

「よっ……！？」

そりゃ倒れる。

大人ならまだしも俺みたいな子供には無理です。

パートナーになるんならこの抱き着きをさせないようにしなきゃいけない、と思いつながら俺は背中をさする。

（それでも嬉しすぎて痛みなんかすぐにどっかいっちゃうっていったら笑われるのかも）

ドーパミンかなんかでてるのかもしれない、とか変なことを考えながら笑う。

でも明日辺りにアザになって今日より痛がるだろうことは確実だった。

第一話 はじめましての始まり（後書き）

やっと主人公の初めてのポケモンが出せたよー！

ポケモンスクールの捏造がひどいなんてもんじゃないですが、書いていて非常に楽しいですポケモンスクール。

ゲームやアニメの設定をいただきつつ、けれどまたそれとは違うポケモンをかけていけたらなあと思います。

とりあえず危ないポケモンには法令をひっかけました。普通のバトルでバンギラスやらギャラドスやら出されたらたまったもんじやないの。

第二話 そんなこんなのご帰宅

今日のポケモンスクールの授業はパートナーとなったポケモンとの触れ合いが主なものだった。

後は午前授業なので寄り道せずに家に帰り、両親にポケモンを紹介したりポケモンを自宅に馴染ませるっていうことになっている。

あと明らかに寝てない生徒がいるから昼寝とかさせて睡眠時間をたっぷりとってもらおう、というのもあるらしい。

まあこんな興奮状態で授業をしたって何も頭に入ってこないし、今は勉強よりポケモンと遊びたい気持ちが強いから俺達生徒にとってはあるがたい。

っていうのを先生たちは把握してるんだろうなあ。たしかに今からちゃんとした勉強をしようってなっても、多分誰も聞かないだろうから。

と、いうわけで。

特に事件もなく（俺はまあ、あったといえばあったけど）こうして新米トレーナーになった俺達は午前中目一杯パートナーとなったポケモンと触れ合い、帰りの会でも連れ歩きの要領でポケモンをボールに戻すこともなく、結果放課後になってもポケモンを出したままという形で今日のスクールでの一日を終えることとなった。

だって、さあ？　せっかくのパートナーを戻したくないじゃん？

休み時間だろうが授業中だろうがなんだろうが、ずっとずっと楽しみに待っていた自分だけのポケモンをボールに戻すなんてことは出来ないわけで。

皆もそんな気持ちなのか帰る段階になってもポケモンを戻すことなく、当たり前のようにポケモンと仲良く一緒に教室を出ていく。両親や兄弟に自慢するんだなんて言って帰っていくクラスメイトに手をふりながら、さて俺も帰るかとか家が近くいつも一緒に帰っているダイチに声をかけた。

「ダイチ、帰ろう！」

「おう！」

お互い興奮がさめてないからか話す声はいつもよりいささか大きかったのは自覚できたけれど、テンションが下がらないこの状態では声のボリュームを下げることはどうしても出来ない。それだって、俺だけじゃないんだろうけど。

机にかけてあったリュックを肩にかけ直して、ころころと転がりながら移動するタマザラシと一緒に先に教室を出る。

それから早く、と急かせばすぐにダイチもやってきて、俺達は今日の感動やら驚きやらを話ながら普段はだらだらと歩く廊下をあっという間に通り抜け外へと出た。

途端にギラリと太陽が俺達の顔を照らす。

熱中症にならないように朝被ってきた帽子を取りだそうとリュックのチャックを開けていると、ダイチが

「そういえばさあ」

とさっきまでの話題を変えてタマザラシを見た。

タマザラシは段差でもお構いなしに転がってわずかに弾み、それが楽しいのか段差を見つけてはそれを繰り返している。

しかもそれだけじゃなくて、地面の上もゴロゴロと移動するせいで青かった体毛がちょっと移動しただけでもう茶色くなっている。

簡単に言うと、少し前よりずっと汚れていた。

「なんでコイツ、歩かないで転がり移動してんの？」

「タマザラシって歩くより転がる方が移動速度が早いし、慣れてるんだって。だから転がることはタマザラシにとって歩くより都合がいいんだって先生が言ってた」

「ふーん、へんなの」

へんなのって、……いやまあ、足がちゃんとあるのに歩かないのはダイチにとっては可笑しいのかもしれないけどさ。

俺はタマザラシっていえばどうしてか「転がる」のイメージが強いからこれといって違和感がないんだよなあ。トドゼルガとかになったら話は別だけど。

「まあポケモンもイロイロいるし。：ちょっと止まっていいい？ 帽子がみつかない」

「いいよ」

ダイチに立ち止まってもらって、俺はリュックの中にしまったはずの帽子を探す。

中は男らしいといえば聞こえはいいけれど、実際には物を適当に入れているせいで目的なものが見当たらないだけだ。

リュックの中を更にひっちゃかめっちゃかにしながら探していると、ダイチが俺が歩みを止めたからか転がることをやめたタマザラシをじっとみつめて、それからまた変だよなあと言口にした。

「転がりながら移動するポケモンだっているよそりゃ」

「いやそうだけど。そうじゃなくてさ」

「…？ よく分らない。ダイチのはワシボンは飛ぶじゃんか、それと似たようなものだろ？」

「いやまあそれはそうだけど」

「かっこいいな、ワシボン」

「それについては同じ意見だ！」

そう言って笑うダイチの腕の中にはついさっきパートナーとしてもらったワシボンがおとなしくおさまっていた。

ああ、飛行タイプもいいなあ。ダイチはやってないけどゲームに出てきた鳥ポケモン使いたいに肩に寄せたりするのってなんかいいよね。

俺はタマザラシがパートナーで満足だし後悔なんてカケラもないけどさ。

進化すれば波乗りだって使えるようになるし、力持ちだし、氷タイプの中でも強い方だ（って俺は思ってる）し。

ただ、タマザラシとパートナーになる前の俺の予想は、もらうポケモンはもうちょっと凶暴性が高いポケモン（まあタマザラシも最終進化系であるトドゼルガは国から危険視されているのポケモンなので危険といえは危険なんだけど。でも進化が二回あるポケモンはだいたいトレーナーの実力不足のせいで最後まで進化出来ない奴がほとんどだから結局のところ危険とは思えないんだよなあ。だからか進化が二回あるポケモンの最終進化系は大抵国から危険視されてたりする。ゲームと現実とのギャップだ、ゲームじゃ最終進化系なんて終盤には当たり前前の世界観だったのに）なんじゃないかと勝手に思ってたから、驚いたといえは驚いたけど。

モノズとかヨーギラスを密かに期待していた、なんて言うത്馬鹿にされるかもしれないんだけどさ。

でもちよつとは期待しちゃってたわけ。

まあ後から考えればドラゴンタイプは希少価値めっちゃ高いし、ヨーギラスなんて山の奥地に行かなきゃ捕まえられるからやっぱり希少価値高い、言うなれば「レア」なポケモンで、ゲームとは違ってあそここの草むらにいれば確実に会える・生息しているなんて決まっていないうばかりか、メタモンとかを使って卵産ませればいいじゃないってワケにもいかない。

育て屋に預けても簡単に産まないばかりか、卵グループ以外にもポケモンたちの相性があるだとか色々あるんだと知ったのは記憶に新しい。

ゲームの世界観だけじゃ間違いだらけの世界なんだ。

今でもゲームの世界の常識を持ち出してしまつて混乱してしまうことが多々あるけど、この世界じゃこれが常識。

御三家だってゲームじゃ出てこないだけで、この世界では野生が存在するしだからこそ初心者用にと配られているんだから（まあほとんどの御三家ポケモンは研究所や育て屋で繁殖した子らしいけどね）決して希少価値は高くない。

かといって珍しくないわけじゃないけど、まあドラゴンタイプより価値は低い。

そんなだからドラゴンタイプなんて夢のまた夢なわけで。

でもさ、俺は成績よかったから特別な子がくるんじゃないかなーとかちよつと思っちゃったんだよな。

夢見すぎなのは承知で、さ。

だっていいじゃないか夢見たって、子供なんだから！

男なんだからドラゴンやら怪獣に似たポケモンを期待しちゃうのは当然だろうが！！

ゴツイ系とかカッコイイ系のポケモンとか好きなんだよ俺！

だから飛行タイプのポケモンも結構好き。ピジョットとかオオスバメとかムクホークとかかっこいいし、グライオン辺りも好きだ。ワシボンの進化系であるウォーグルもちろん好きだ！

「つてか、ダイチはワシボン肩に乗せないの？」

「うん、重いんだよワシボン。先生に聞いたら10キロもあるって話でさあ」

「へえ…」

でもタマザラシよりマシだと思う。こっちは持てすらしないうという体重なんだぞこの野郎。

さっき俺の胸に飛び込んだタマザラシもなんとなく気づいてくれたのかそれからは俺に体重をかける動作をすることもなく、今は立ち止まった俺の足あたりにぐりぐりと体を押し付けている。

これもスキンシップの一瞬だろう、なんだか犬に懷かれてる気分。体毛についてる土のせいで俺のジーンパンも茶色に変色し始めてるけど、嬉しい。

そんなこいつは40キロで。

「ポケモンはやっぱ見かけによらないなあ。そっか、10キロかあ」
ワシボンの身長はタマザラシより低いものの、それでも10キロも体重かるとは予想出来ない。

飛行タイプって軽やかに空を飛ぶから体重があんまないイメージにあったんだけどなあ。

半分の5キロくらいの体重かと。その方がまだしっくりくるのはおかしいんだろうか、イメージ違い？

「ソラのタマザラシだって重いんだろ？」

「うん、まあ。持とうとは思わないくらいには…」

「俺のワシボンはまだ持てるぞ。持つ？」

「いや、いいよ。鳥ポケモンの持ち方ってまだよくわかんないから」

両腕でしっかりと持たれているワシボンを差し出されて、俺は首を横に振る。

ってか突っつかれたらと思うと怖いのもあるんだけどさ。

「ふーん、じゃあ今度教えてやるよ！」とまた抱きなおしたダイチに頷いて、俺は腕の中でおとなしくしているワシボンを見る。

正直なところ、ダイチにワシボンが渡されるとは思わなかった。

ワシボンなんて進化が遅いポケモンが最終のパートナーに選ばれるとは、ダイチをどう評価していたんだろうかと生徒用のポケモンを選んだ先生に聞きたくなる。

いや見た目的にはやんちゃっこを具現化したようなダイチにピッタリのポケモンだとは思うけど、俺の知識からじゃ初心者にピッタリのポケモンとは思えない。

ワシボンの進化した姿のウォーグルは勇敢に戦うことで知られているポケモンだが、ワシボンからウォーグルまで育てるのはゲームでも面倒だというのに、こっちの世界じゃさらに大変らしいんだよね。どうも進化までかなり時間がかかるとか。

それだけならまだしもウォーグルに進化させるにはトレーナーの腕も試されて、どうも進化させる意思があってもトレーナー自身の腕

がおよばず進化させられない奴も少なくないとか。

進化せずとも満足してしまうトレーナーもそれなりにいるらしい。
そんな話をボチボチと聞くポケモンだ。

それなのにポケモンスクールの先生たちはダイチにワシボンを渡した。

これはダイチならウォーグルに進化させられると見越してなのか、それともたとえ進化せずともワシボンもまた勇敢に戦う性質だからダイチにはぴったりの思ったのか…。

ま、どっちにしてもダイチは将来有望っていう評価をもらったってことなんだろうなあ。

優等生やってた俺より有望株だったりして！…それはちよつと落ち込む。

ダイチより俺が優れてるところってそういう部分しかないんだぞー、遊びや体の動かし方とか斬新なアイデアとかはダイチの方がずっと上だし。

でもま、さ。

そういう自分のもやもやとか疑問を置いておけば、感想はひとつしかなくて。

そういえばその感想をまだ言っていなかったな、と俺はワシボンからダイチに視線を戻して言った。

「ダイチにピッタリのポケモンだな、ワシボンって！」

「そうか？へへッ！…ソラは、なんか意外だけだな」

「そうか？」

むしろそれは俺が思っていた、なんていったら「じゃあ今のピッタリって言葉は嘘なのかよ！」なんてことになるから言いほしなないけ

ど。

「氷タイプとか水タイプって俺には合わない？」

「あー、そうじゃなくてさ。なんていうかさ、ヘンなんだよ。うん、ヘン。俺さ、ソラなら成績もいいしもっとかっこいい感じの奴を貰うんだって思ってたからさあ」

それなのに、とダイチがタマザラシに視線を向けるとさすがにタマザラシも怒ったのかくりくりとした目を釣り上げてダイチを見上げた。

それだけでは足りないと思ったのか、頬を膨らませてしっかりと不満を表して。

うーん、タマザラシ本人はダイチを睨みつけてるつもりなんだろうがイマイチ怖くない。ダイチも同じ感想なのか特に怖がってないし。むしろそれはかわいいの部類に入るんじゃないんだろうか。

それにしてもヘンってそういう意味ね。

手探りで見つけた帽子を取り出して頭にかぶりながら、でも俺は決してヘンじゃないと思った。

そりゃもううまでは優等生やってたから他のポケモンを期待してたけど、今は違う。

俺にはまだまだドラゴンポケモンのトレーナーになるには未熟だろうし、それになにより ゲームと比較してしまう今の状態ではあまりにもなポケモンは手に余ってしまうだろう。

もし俺が思うポケモンをもらっていた場合それに気づかなくて、なんか大変なことになっていたかもしれないし。

「俺はパートナーがタマザラシでよかったと思ってるんだけどな。俺はまだまだ新米トレーナーだし、だけどタマザラシはそんなこと気にしてないのかすぐ打ち解けられたし」

「そうかあ？」

「そうだよ。仲良くないより仲良い方が絶対いいだろ？初めてのポケモンだし」

そう言ってタマザラシの頭を撫でれば、それで機嫌を直してくれたのかタマザラシは釣り上げていた目を細めて心地良さそうにした。うーん単純、というかなんというか。まあこれで機嫌を直してくれるのはありがたいけどさ。

「まあソラがいいんなら俺はいいけどさ。進化したらかつこいいもんな！」

「だろ！トドゼルガがつくてかつこいいもんなあ！」

トラウマだけど。そう心の中で付け足しつつ、俺はダイチの言葉を素直に受け取る。

育てるのが難しいだとかゲームではああったこうだったと考えるしまう俺と違って、ダイチの言葉はいつだってまっすぐだ。

俺はちよつとそれが羨ましい、先の不安なんて考えたってしょうがないのは分かってるのにさ。

前は将来が見えなくて今を生きるのに必死だった反動からか、前が拓けた途端にこのネガティブ要素だもんな。

ダイチを見習わないとなあ。

帽子も見つかったということで歩き出す俺はそんなことを考えながら、俺たちが歩き出したからついてくるための足元をゴロゴロと転がるタマザラシを見る。

こいつもこいつで能天気そうだよなあ、こいつからも見習わないと。

段差があれば弾んで転がって体中がそろそろ泥だらけ状態だ。
なんていうか、悩みがなさそうだよこいつ。いいことだけどさ。

俺と同じようにゴロゴロと転がるタマザラシをやっぱり不思議そうな目で見ていたダイチは、やがてあ、と声をもらして俺の方を見て口を開いた。

「そういや、ソラはニックネームはつけるのか？」

「一応そのつもり。ダイチは？」

「俺もそのつもり！ソラはゴロとかつけんの？　ごろごろ転がってるだけに」

「いやそれはない。ニックネームはさ、じっくりと考えてみることに決めてるんだ」

なんせゲームとは違って姓名判断師に頼んで簡単に換えられるものじゃないし。

黒歴史になりそうなニックネームにはしたくないから、最低でも一日は考えるつもりだ。

自分が納得してタマザラシも納得出来る名前を思いつくまで妥協はしない！

「ところでさ、ずっと気になってたことがあるんだけど」

「ん？　なんだ？」

「ダイチはなんでずっとワシボンを抱えてるんだ？　もしかして子供だからまだ空をとべないとか？」

10キロなんて1・2ヶ月分の米を持ってる重さなんだろう？　持ったこと無いけど。

絶対重い、俺だったらそれを持って帰り道をしっかりと歩けない。

ダイチだってつらいのか、額に汗をかいていた。それなのになぜ。

「いや、だってさ…」

「重くない？」

「重いよ！でもさあ」

でもさあ、ともう一度言ったあとダイチは頬を赤くして目をそらす。それはダイチが照れてる時によくやる仕種だ、主にクラスの委員長という時にこの仕種（プラス素直になれない言葉）が出てくる。

しかし俺の質問のどこに照れる要素があったんだ？どこにもなかったよなあ、と自分の言った言葉を反芻していると、俺が答えを見つけるより先にダイチが口を開いた。

「だって、空飛んでどっか行かれたら嫌じゃん！」

「なるほど」

その気持ちは分からなくもなかった。

むしろ飛行タイプのポケモンを手にしたら俺もその不安を持っていたかもしれない、フワンテとかがパートナーだったら絶対に離せなかっただろうしなあ。

でもそれはフワンテが軽いからだ、この体で10キロのポケモンをずっと抱きかかえているなんて多分俺には出来ない。

ダイチの言葉をきっかけに再び止まった俺達にタマザラシも転がるのをやめてまた俺の足にぐりぐりと体を擦り寄せてくるが、俺は今度はタマザラシの頭を撫でることなくただ微笑ましい気持ちでダイチを見ていた。

（弟ってもしかしたらこんな感じなのかもしれないなあ）

友人だが、見た目は同年齢だがダイチはたしかに俺の年下なのだ。それを改めて思い知らされながら、俺はダイチがいたたまれなくなつて「さっさと帰ろう！」と赤い顔でそう叫ぶまで足を止めて微笑ましいという気持ちを抱かずにおれないまま、その光景を眺めていた。

まあ、結局のところ帰り道の途中でダイチの体力が尽きてワシボン
は空を飛ぶことになったんだけどね。

でもどこかに行くことなくダイチについていったのを見てダイチが
凄く嬉しそうだったから、まあ結果オーライだと思うよ。

第二話 そんなこんなのご帰宅（後書き）

タマザラシもワシボンも私の趣味です。ワシボンってワシボシやなかったんか…。

ポケスクでは悪タイプ縛りとかしてないんでどのポケモンをメンバーに入れていこうか悩み中です。ポケモン多すぎて縛りきれないです。

第三話 過ぎていった数日と初バトル！

あの後ダイチと別れ家に帰った俺はパートナーとなったタマザラシを家族に紹介（と少しの優越感と自慢）して、両親におめでとうと優しく迎え入れてもらいながら一日を過ごした。

前の世界ではペットなんて夢のまた夢だったから両親のポケモンへの反応が気になったけど、どうやらこの世界の俺を取り巻く環境ではそんな心配は無用だったようだ。

心配そうな顔も嫌そうな顔もされず、父さんも母さんも笑顔で受け入れてくれた。

それにほっとしながらも、俺はタマザラシがこの家に早く慣れてくれるようにと出来るだけタマザラシが住みよい環境（と言ってもタマザラシ専用のクッションになりそうなものを引っ越をしてそのままになっている未開封のダンボールから引っ張り出したりするだけのことなんだけど）を整えて、それから特にこれといったトラブルもなく新米トレーナーとなった日は終わった。

まあいつもの一日として終わったわけじゃなくて、夕飯は御馳走でケーキまであったし、やっぱり興奮して眠れなくて夜更かしも苦笑されながらではあったけど許されたし、ちよっと背伸びしたようなカッコイイバッグをトレーナー祝いとしてもらったりと俺としてはもう嬉しいことが山積みの日目だったわけだけだね。

最初はタマザラシって氷タイプだから家で一緒に暮らすためにはどうしたらと思うていたんだけど、そんな俺の心配をよそにタマザラシは我が家を居心地良さそうに過ごしてくれたし。
幸いなことにタマザラシ自身が人懐っこいことも利点になったんだ

ろう、すぐに俺の両親にも懐いてくれたしこの家にも特別不満が無いようなので問題もない。

水タイプだからと言って部屋をガンガンに冷やす必要もないみたいだ。

ちよつと電気代がヤバイことになるんじゃないかとヒヤヒヤしていたがその問題も無事解決。

ただ冷たい風呂好きみたいで、皆が入って次の日にはすっかりと冷えたお風呂に気持ち良さそうに入っていたから、これから先は洗濯でお風呂の水を使うより前にタマザラシをお風呂に入れて体を洗うことを心掛けようとは思った。水タイプでもあるから、水好きなんだろうと思う。

タマザラシは転がる習性があるから毎日風呂で体を洗うことになるけど、それも楽しい。

特別タマザラシのために必要なものがあるってわけじゃないし、ポケモンって案外家で一緒に暮らすことを推奨されてたり？　とか思ったり。

（そしてここで今更ながら、ポケモンスクールの先生が家庭で一緒に暮らせないようなポケモンを渡すわけないと気がついたわけなんだけど。俺もまだまだらしい）

そうやって新発見の連続ながら俺とタマザラシの相性もいいおかげかパートナーとなって数日が過ぎてもこれといったトラブルもなく俺達はその数日の間に互いのことを少しずつ知っていき、さらに距離を縮めていった。

ポケモンスクールの方でも今はパートナーになった子について調べたり、野生のポケモンの捕まえ方についてを復習したりと基礎知識

を復習しているような状態だから勉強で困ることもない。

これでテストとかきたらタマザラシと遊ぶ方に意識がいっちゃって満点をとることが出来なくなるかもだからありがたいことだ。

他の教科はなんともなるけど、ポケモン関連は復習しないと覚えられないからね。覚えること多いし。

何よりゲームとの違いを覚えなおすのがさ。どうしてもゲームの常識の方が慣れてて…。

ポケモンスクールでも新しいことを勉強するんじゃないっていうのは地味にありがたいことなんだよな、ポケモントレーナーになったんだからとこれまでの総復習がメインになってるおかげで忘れている知識がないか確認出来たし、学校で復習をやっている状態だから家での勉強に必要以上の時間がとられることもないしで。

そんなゆったりとしたスクールのスケジュール。

まあゆったりなのはもう一度知識を頭に入れてほしいわけじゃなさそうなんだけどさ。

やっぱりというかこればかりは仕方が無いというか、クラスメイトの中にはなかなかパートナーが懐いてくれない子もいて、そういう子は頑張ってパートナーとの関係を良好にしていかなければならないから勉強に手がつかないんだそうだ。

初日の授業で俺とタマザラシ、ダイチとワシボンはすぐに仲良くなれたけど、数日をかけても人に慣れていないのかまだ主人になったクラスメイトときこちない関係のままのパートナーも少なくない。担任は時間をかけていけばいいと焦っていない様子だったのでこれくらいは普通のペースなのかもしれないけど、懐かれてないクラスメイトはどこか寂しそうだし、時々妬ましそうな目で見られたりする。

まさかこの俺がそんな視線をもらうことになるなんてさ、前までは逆の立場だったのに。

なんて俺の感情は置いといて、なんにしてもパートナーと思うように仲良くなれないのは焦るものだと思う。

それがさらに悪循環を生み出すんだろうけど、かといって解決法なんて俺には思い浮かばない。

早く友達になれるといいな、なんて応援するくらいだ。

それは順調パートナーと仲良くなったほかのクラスメイトも同じで、だからかちよつと教室内にぎこちない雰囲気が出てしまふときがある。

ただどそういう時のフォローは担任が全面的に引き受けてくれて、やっぱりここはいい学校なんだなあって思わずにはいられない。

多分復習メインなのも勉強どころじゃない生徒をおいてけぼりにしないためなんだろう。

それだけじゃなく、補習みたいな感じでまだ仲良くなってないクラスメイトは放課後の時間を使って特別授業をやったりもするらしい。仲良くなるきっかけ作り、みたいなものとか。

まあ俺とタマザラシの仲は良好なのでとくに担任から引き止められたりすることなく、特別授業には呼ばれない。

だから最近学校から早く帰ることが出来るようになった。イコー、その分暇な時間も増えた。

こういう空いた時間がある時はいつもダイチ達と遊んでいたんだけど、多分ダイチ達はしばらくの間パートナーと遊ぶのに忙しいだろうから今誘っても多分断られる。

メンバーの中にはまだポケモンとそこまで仲良くなっていない奴もいるし。

誘ったら遊んでくれるかもだけどなんか悪いし、ぎくしゃくするのは分かりきっている。

それどころか俺と遊んでる暇があるんならポケモンと向き合いたって思いながらも付き合わせるになっちゃうかもしれないし。ダイチみたいにキツパリと物事を言える奴等だけが集まってるわけじゃないからなあ。

ならこの暇な時間をどうするのか。

答えはひとつ、ポケモンとのバトルの特訓だ。

せっかくポケモントレーナーになったんだから、ポケモンバトルをしないなんてもったいないことは出来ない。

かといってぶっつけ本番でバトルが出来るほど俺は器用じゃないし、初心者用にと俺のところに来たタマザラシだってバトルは不慣れだろう。

だからこそその特訓。

ポケモンマスターを目指す！ってわけじゃないけど、ポケモンバトルをやる以上は強いトレーナーになりたいって思うのは当たり前！その目標を叶えるためにも、まずはその土台から作っていかねければ。

というわけで、俺は一人タマザラシをつれてバトルの特訓をするためにと町外れにある手入れも行き届いていない空地まで来ていた。

この町は交通の便がよく、また都会だ。

他の町に繋がる道は四つもあり、そしてゲームと同じようにその道には数字を振り分けられた名前がついている。

1番道路とか2番道路とかそんな感じに。番号を覚えていないと混乱するっていう不便さがあるけど、ゲームをやっていた人間にとっては馴染み深い。

本当はポケモンのトレーニングってことなら皆その四つの内どれかの道路でやるんだけど、俺はあえてそこじゃなくあえてこの空地を選択した。

それはトレーニングしているのを知り合いに見られるのが恥ずかしいから、ということももちろんあるんだけど。

それだけじゃなくて、俺のほかに誰もいない広い空地を思う存分使えるからという利点のためでもある。というかそのため。

手入れがされていないからポケモンの住みかになる草むらもあるし、技の的にしやすい物がそこらへんにゴロゴロしている。

それはある程度整備されている道路よりずっと俺が思っていた「ポケモンバトル」をする場所に近くて。

だから（多分）そこらの場所よりずっとトレーニングしやすいと思っっている、いわば俺とタマザラシの秘密の場所だ。

秘密の場所。うーん、いい響き。

秘密基地とかに憧れてたからだろうなあ、こういうのは凄い好きだ。

「よしっ！それじゃはじめるか、ノベル」

俺の言葉と一緒に空地まできたタマザラシは、特にバトルに対しても恐怖心がないのか手を叩いてやる気満々に頷く。

その様子に俺も頷いて気を引き閉めて頷いた。

ちなみに初日の俺が手がないと勝手に勘違いして握手をやめたわけだが、実のところタマザラシにはしっかりと手があった。

体毛に隠れて見えなかったソレを見つけたのはタマザラシをもらって家に帰った日の夕飯の時だ。

タマザラシは食事を食べる時に喜んで手を叩く習性があるらしく、俺が母さんに教えられながら作ったポケモンフーズに対して嬉しそうに手を叩いたのだ。

その時の驚きつたらなかった。まだまだ知識が足りないことを思い知らされたよ、本当に……。いや、嬉しかったけどさ。

あ、ちなみにノベルっていうのは俺がつけたタマザラシのニックネームだ。

本当はノベルティってつけたんだけど、それじゃ長いってことで通称ノベル。

個人用に作られたアイスのことをノベルティっていうらしいんだけど、氷タイプだしいいんじゃないかっていうことでいくつかの候補からこれになった。

ちょっと背伸びしすぎたニックネームだったかも…ああいや、でも俺もタマザラシも満足しているのでよしだろう。

人がどう思うかより、俺たちが満足しているかどうか問題！
それでもって俺たちは満足してるから問題無し！

だからタマザラシことノベルの名前を呼んで、俺は草むらを掻き分けていく。

昨日までは実際にポケモンと戦う前にと木に対して水鉄砲やアイスボールの練習をしてきたのだけど、数日の間に少しは慣れてきたことが自分でも分かったから今日は実戦だ。

まだトレーナー戦ってわけじゃないけど、野生のポケモンとのバトルはトレーナー戦をやる前に必須だろう。

それに今はまだポケモンスクールの方の授業は復習ばかりだけど、もう少ししたらポケモンバトルの授業も入る。

その予習だってしたいし、その授業の前に適性検査の試験が実施されるからそれ対策でもある。

やっぱ両親のためにも出来るだけ優等生でいたいし。それに褒められるのは嫌いじゃないし。

そんな打算を含んだ考え事をしながらさごと草むらを掻き分けていくんだけど、突然現れた人間に驚いたのか戦う気がないのか野生のポケモンは逃げていってしまう。

ゲームだとエンカウントですぐバトル！草むらも海上も洞窟内もエンカウント率高いなあと思ってたけど、実際問題はそうじゃないらしい。

さすがに逃げていくポケモンを追う気持ちにはなれないのでひたすら好戦的なポケモンを求めて草むらを掻き分ける。

（おっかしいな、こうやって草むらを歩いていけばバトルになると
思ってたんだけど…）

好戦的なポケモンはもしかして道路の方で、だからこっちは人氣が
無いとか？

：ありえそうで怖いな、思った瞬間、俺たちから少し離れたところ
の草むらがガサリと音をたてた。

それが何か考えるより前に、長い草を掻き分けて突進でもしてくる
かのようなスピードでその音を発した生き物らしきものは俺たちの
ところへと向かってくる。

（う、わ！？）

あまりのことに体を硬直されてそれを見ていれば、その生き物は俺
の目の前で止まる。

そうして近づかれてやっとその生き物がこのあたりでは多くの野生
が棲息しているムツクルであることに気づいた。

長い草のせいで全体が見えなくてまったく気づかなかった。

でも黄色い嘴に灰色がかった翼、愛嬌のある姿はゲームでも何度も
見たし学校へ行く時にもよく見たムツクルで間違いない。

ノベルより小柄だが恐怖心はないらしく目を鋭くしてこちらを見て
くる姿は、いつも見るムツクルとは大分違うようにも思えたけれど。

思い切り目があって、俺も目をそらせなくなる。なんか今にも戦闘
開始出来ますって雰囲気だ。

それに飲まれそうになって、でも俺達もそれに負けちゃいけない
とあわてて勢いよく首を横に振ってやる気を取り戻す。

「よし、がんばろうノベル！」

ついてきたタマザラシにそう呼びかければ、ノベルも気合い充分の様子で頷いた。

幸い相手は飛行タイプ。タイプの相性を考えればこちらが有利だ。初戦の相手としては嬉しいタイプって言えるだろう。

だけどゲームとは違って相性もひっくりかえされることが多いのがこの世界。

有利だというだけで確実に勝てるわけじゃない。

それだけでなく俺とノベルはバトルの素人なのだから油断は出来ないんだ、慎重に命令しバトルを行わなければ！

「ノベル、アイスボール！」

とりあえず先手必勝とばかりにノベルにアイスボールの指示を送る。
(これのどこが慎重だと言われそうだけどこれしか手が思いつかなかったんだ！)

俺の指示を受け、ノベルは数日やっていた練習のおかげで躊躇することなく自ら吐き出した水を凍らせ、それを力いっぱいムックルへと投げつける。

よし、完璧だ！うまくいった！

はずなのだが、冷却されたアイスボールのスピードはムックルにしてはそこまで脅威ではなかったのか、鳥ポケモン特有の翼を大きくはためかせるとムックルは空へと急上昇してしまう。

アイスボールが到達する頃にはそこはすでもぬけの殻。

だからといって空まで追いかける術のない俺達は空を飛ぶ見守ることしか出来ない、……って違うだろ！

空から攻撃される前になんとか攻撃しないと！

えーっと、遠距離でも届く技届く技届く技……！

「そうだ！ノベル、水鉄砲！」

今のノベルでは残念ながら空高くアイスボールを投げる腕力はない、ならばと覚えている技で一番遠くまで技を飛ばせる水鉄砲を指示した。指示した後空へいるムツクルに水鉄砲を当てるなんて至難の技かと思っただけ、腕力を使わないからかアイスボールよりもずっと早く水鉄砲は空にいるムツクルへと届く。

さすがに一発必中ってわけにはいかない。でも避けるムツクルに対し尚も水鉄砲で狙っていけば、その内の一発がムツクルの翼にヒットした。

さすがに翼に水鉄砲を直撃させられて堪らなかったのだろう、ダメージを受けて落下するように落ちて来るムツクルを向かい今度は効果抜群の一度アイスボールを指示、したのはいいのだけれど……

「うわっ！？」

途中で痛みから失いかけていた戦意を取り戻したムツクルは投げつけられたアイスボールを翼で叩き返し、そのアイスボールはあらぬ方向へと飛んでいく。

（そんなまさか！効果抜群の技なんだぞこれ！）

これでフィニッシュだと思っていた俺達はそれに動揺して咄嗟に次の行動を移せない。

そしてそれだけでは気が済まなかったのかムツクルはこちらの番といわんばかりに一気にノベルへの距離を詰めてきて、力強いことで有名な翼でもってがら空きのノベルのお腹へと強烈な一発をいれた。

「ノベル！」

重い一撃にノベルがのけ反る、そしてそれをチャンスとみたのかムツクルは距離を離すことなく再び翼を大きくはためかせた。

（まずいっ！）

バトルは素人だけど、でもこの攻撃を何発も喰らうのはマズイってのは分かる。素人がマズイって分かるんだからかなりまずい！

だが避けるには時間なんてない。

ならばとノベルに慌てて次の指示を送る。

「ノベル、丸くなるでお腹をガード！」

避けられないなら防御体制！もうこれしかない！

ただ指示が急すぎて間に合うかどうかが不安だったんだけど、ノベルは俺の指示に躊躇なく従ってくれて、結果ムツクルの攻撃がくる一瞬前に身を丸めて翼で打つの衝撃を和らげることが出来た。

丸まった状態で思い切り打たれたので空中に転がるように放り出されたが、この状態ならまだ立て直せる！

空中ならこっちのものだとノベルを追い掛けて空を飛ぶムツクルに
今度こそ技を決めるために、俺は叫んだ。

「そこからムツクルへ凍える風！」

アイスボールでは準備までに時間がかかりすぎるし避けられる可能性も高い。

なら覚えている中で氷タイプの技であり、威力はそんなにないもののすぐに攻撃に移せ回避するチャンスが少ない凍える風の方がよっぽどいい！

それに空中にいても凍える風ならば苦もなく使えるはずだ！

俺の指示を聞き丸くなるから体制を元に戻したノベルが大きく息を吸い込み、その後すぐに冷却した息をムツクルめがけて思い切り吐き出す。

それは痛いほどの冷氣となって、追撃のために近距離まで接近していたムツクルへと襲い掛かる。

ゲームでは威力が低い技である凍える風は、この世界では立派に使える技だ。

冷凍ビームや吹雪にはやっぱり威力が劣るが、だからといって追加効果の有無は関係ないくらいに採用できる技。というか水鉄砲でも威力が凄まじいこの世界では、冷凍ビームなんて大技なのかもしれない。

（なんたって体当たり一発でも重い世界だからな！）

ムツクルもまさかの空中で攻撃されるとは思わなかっただろう。
突然の冷氣の強襲に慌て、先ほどの俺達のように驚き避けることが

出来ずに凍える風を真正面から浴びる。

空中戦は明らかにムツクルの方が有利で、だから油断していたんだろう。

さっきの俺たちみたいに。

「よし！」

ノベルの受けた一撃より、相性の関係もあって明らかにこっちが食らわせた一撃の方が重い！

このまま追撃もいけるか、と考えたが、それを指示するよりも早くムツクルが地面へと落ちていく。

おそらくは今ので戦う体力がなくなったんだ。

そりゃ水鉄砲のダメージもあるんだから当然か。

ボールのようにノベルが地面に落ちて弾んだその後、ムツクルも力なく地面に落ちる。

まさかここから不意打ちはないよな、とムツクルに近づいてみても、ムツクルは目を回して倒れているだけだ。

それはつまり、えっと、

「…や、やった…？」

勝った？ 勝った！

「ノベル、俺たちの勝ちだ！初勝利だ！」

初めての野生のポケモンとのバトルで白星！

そう思うと体の奥から何かが湧き上がってきて、その衝動のまま俺

はノベルに抱きつく。

本当はその体を持ち上げて抱きしめたかったんだけど、さすがにそれは俺じゃ無理。

でもこうして喜ぶことが出来るからノベルと一緒に喜んで喜んで

喜んでいる最中に騒音に近いくらいの、まるで一斉に鳥がはばいたかのような音を聞いて俺たちは振り返る。
そしてそこにいたものを見て瞬きをする。

あれ？　なんだこれ幻覚？

もう一度瞬き。でも消えない。ノベルと顔を見合わせて首をかしげてまたそっちを見る。やっぱり消えてない。

……ってことは現実！？

「う、わ……」

出そうと思っていた悲鳴は喉の奥で声にならずに消える。
ついでに目の前に光景も消えてくれたらよかったのに！

そう思ってしまうくらい、目の前にはムツクルの大群がいた。
その中央には、さっきノベルが投げたような記憶氷の塊を頭に乗せているムクバードが。

それを見てどういふことが分からないほど俺は馬鹿じゃない。
馬鹿じゃないから分かるんだ！

これってすっごいマズイ状況だろ！

「逃げるぞ、ノベル！」

喜びなんてすっかりと放り出して、俺達はいっせいに飛び掛かってくるムクバードたちから逃れるべく慌てて草むらを駆け出した。

第三話 過ぎていった数日と初バトル！（後書き）

野生のポケモンとのバトルで何がイヤって、主人公しかしゃべる人間がいないことです。おかげで長ったらしい文になってえらいこっちゃ。

タマザラシのニックネームは目の前の箱を頼りにしたので意味が間違っていたらすみません。ところでタマザラシの鳴き声ってなんなんでしょう？

「たまー」とか？ いえいえそれではタマタマとかぶるので「ザラシ！」とか？

ザラシじゃ鳴き声として書きにくいことこのうえないですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3416w/>

ポケスク！

2011年12月2日23時49分発行